

# 「私の保育のはじまり」

——あたらしく入った子どもをめぐって——



小野 真理子

四月に新学期が始まって、十日の入園式に出席する子どもたちの中に、私どもの一人息子Hの姿も見られた。

「入園」という保育のはじまりは、Hにとっても母である私にとってもいろいろな意味で「はじまり」であった。

ここで、過去の事になって恐縮であるが、私ども両親が一年前に、Hをほかの幼稚園に入園させた時のことを書かせて頂きたい。私が仕事を持っていたのでそれまでHは、一日のうちの大半を祖父母の家で過ごし、のんびりと育てられた。

祖母はHにとって最愛の人であった。私ども両親は、三歳のHにとってもうひとつ楽しい場所が増えるとういと思ひ、Hを祖父母の家の近くにある幼稚園に入園させた。しかし、H

は初めからなじまず、半年もたつと「幼稚園へは行かない、おばあちゃんの家に行く」と言つて園の門をくぐろうとしなくなつてしまった。その原因は、「幼稚園」でも「おばあちゃん子」でもなかった。それは、朝は寝ているところをたたき起こされ、朝食もそこそこに自転車の荷台にのせられ、ラッシュの電車で三十分間揺られて駅へ着く。駅からは祖母に連れられて幼稚園へ、幼稚園で三時間余り遊ぶと祖母の家へ、そして夕方のラッシュ時には再度朝のコースを戻ってくるような、殺人的な生活のリズムに因るものであることはあきらかであった。こうした子どもの一日のリズムが無視された生活の中には、子どもが新しい場を自分の目で確かめたり

楽しんだりする余裕が用意されていなかったのだ。そこでHはその幼稚園を中退し、また元どおり祖母との楽しい毎日に戻った。子どもにとってあらたな場であらたな人や物との出会いを体験するには、その前提として変化しにくい日常的な場、予測しやすい安心な場が、子どもに育っていることが大切である。

たまたま私は今年の三月で、往復に四時間以上かかる職場をやめた。そこで私は、子どもがその生活のリズムを尊重されつつ幼稚園に通える場を作りたいと思った。その第一歩として、母としての私が家庭において安心な場作りをすることにした。そして子どもには、家から子どもの足で歩いて三十分ほどの所にある近所の子どもたちが多く通っている幼稚園へあらたに通うことを勧めた。

こうしてHにとっても、私にとっても新しい保育活動が今年の四月に始まった。

四月に入って間もない二日に、新しく入園する子どもたちのための「一日入園」という試みが幼稚園で行われた。その前夜私がま新しい制服のブラウスにアイロンをかけていると、Hは「アッ」と思い出したようにうれしそうに顔を上げて、何かゴソゴソと捜し始めた。

H「僕のカバンとかねんどの入ってる袋どこ？」新しいお道具を捜しているらしい。

母「H君の机の上に袋あるでしょ。その中よ」

H「あった、あった」袋ごと母のそばに持ってきてひとつずつ取り出して見ている。「名前書いた？ あーここに書いたの。クレヨンにも書いたの？ 一本一本書いたの？ どうして？」などと一人言を言う。

新しい帽子や新しい画用紙が、翌日から始まる新しい生活を楽しみなものにさせているようであった。

一日入園は、空がまぶしいように青い、気持ちのいい朝で始まった。Hは近所のT子ちゃん、K子ちゃん、Y君、K君、そのお母さんたちがそろって出掛けることがよほどめずらしいかのように、この集団からチョット離れながら、ジロと一人一人を見まわしている。日頃よく一緒に遊んでいる他の四人の子どもたちは、「K子ちゃん手をつなごう」「Yちゃんと君と手をつなぎなさい」などとお互いに世話を焼きながら、背すじをシャーンと伸ばして歩いていく。いつもはふざけあって道路の上をころがっていく子どもたちが、ボールのようにはずみながら、誇り高く歩いていく。Hもニヤニヤしながら、次第に誇り高いメンバーの一員になっていった。

ところが幼稚園に近づくにつれて、五人の子どもたちの表情からは笑いが消え、はずむような緊張感には重苦しさが加えられて行った。おとなの方でも、たくさんの濃紺の制服と、林立するおとなたちの中に、自分たちの子どもが巻き込まれていくのを見て、しっかりと手をつながなければならなかった。

クラス編成が知らされ、それまでガッチリつながっていた子どもどうしの汗ばんだ手を離れさせて、母親たちは自分の子どもを、各々のクラスの部屋に連れて入った。

混雑した部屋に入ると、Hは多少上気しながらブスツとして、部屋で遊んでいる子どもたちを見ている。私は、四十一名の子どもにたった一名の保育者が関わることを知って不安だった。こんな大勢の中で一体何が育つのか。一人一人の子どもを大切にできるのか。……止めどもなく心配であった。Hに話しかけてもジロツツと見るだけであり、私は気が重くなっていた。

さてこのクラスのT先生の指示で、子どもたちが親と離れて、部屋の前方に並べてある椅子にすわることになった。当然の事ながら、親と一緒にいたくて泣く子たちがいた。その中でもSちゃんは特別大声で泣き始めたので、他のおとなも

子どもも、みんなSちゃんの方を注目した。Sちゃんの声がガラスをふるわすほどになった時、T先生は小さいけれどよくとおるソプラノで「おばあちゃん！ Sちゃんのそばにいて下さい」と言って自ら椅子を運び、Sちゃんの隣へ置いたのである。おばあちゃんが隣にすわって、Sちゃんの泣き声はピタリと止んだ。子どもたちは「フツ」と息をつき、おとなたちは、改めて衣服のみだれが気になり始めた。Hは食い入るようにSちゃんに注いでいた視線を、T先生に移していた。私は子どもたちがこれから一年間つきあう先生と、素敵な出合いをすることができたことをうれしく思った。

K子ちゃんはHとは違うクラスだが、先生と素敵な出合いをすることのできた一人である。それは入園式が終って間もなく、K子ちゃんが水疱瘡ぼくちやうにかかって、長く休まなくてはならなくなった時の事である。「始まったばかりなのに」と言ってK子ちゃんも母さんも、すっかりシヨゲていた。そこへ先生からお手紙が届いたのである。それも毎日々々その日であったことを、絵と一緒にお便りして下さったのである。K子ちゃんは手紙を渡されるとベツとあかるくなり、すぐに自分でも手紙を書き始めた。その喜び方はお母さんが、「病気になるってよかったねー」と心から言うほどであった。

けれど、先生と素敵な出会いをした子ばかりではなかった。Y君がたまたま「一日入園」の日にお母さんから離れるのが寂しかった時に、一緒に遊ぼうとした先生が手をひっぱってしまった。Y君はワンワン泣いて、幼稚園へ行くことをひどく嫌がるようになってしまった。幼稚園へ行ってもその先生を見ると、恐怖に近い表情でひきつったように泣いた。そんな日がしばらく続いたある日、仲良しのT子ちゃんは幼稚園から帰ると、ふだん着の上から再度制服を着込んで、Y君の家で遊び始めた。「T子ちゃん何してるの？」と尋ねると、「幼稚園ゴッコしてるのよ。だってYちゃん幼稚園いやでしょ、だから……。今幼稚園へお出かけするの」と答えてくれた。こうした仲良しの力が幸じたのか、Y君は入園後十日もすると、泣かずに出発するようになった。ただ、二か月たった今でもやっぱりその先生をこわがるようである。

入園後一週間ほどは、バス通園が行われず、幼稚園への送り迎えは母親の役割だった。Hを含めた五人の子どもたちを、私ども母親のうち二人が交代で送り迎えた。子どもたちは、行きと帰りではまるで別人のようだった。朝は、泣きべそをかきながら、母親の手をしっかり握って歩く子、手をつ

ないでいる相手の子が不用意に手をふりまわすと「僕はH君と手をつながないよ」とイライラする子、「アーンK君手をつながないって」と泣く子、「H君私と手をつなぎましょ、K子ちゃんK君と手をつなぎなさい」としつかりしたところを見せる子、誰と手をつなごうがサッサと幼稚園へまっしぐらの子、みんな朝は個性的に緊張していた。こんな子どもたちが帰り道では、お母さんにどなられても大に吠えられても、道路にねころがり、たのこ「笛」を見つけて大騒ぎした。帰り道は、帰るといっただけでのびのびと笑いたくなるようであった。

バス通園が始まってしばらくすると、子どもたちは「幼稚園へ行くことが当然」といった表情で出かけるようになっていった。そうした安心した様子が見られるようになってきた頃やつとHは、幼稚園で見たこと聞いたことを話してくれるようになった。

はじめのうちの話す内容は、もっぱら保育活動の中でも課題活動のことだった。

○「今日お遊戯室にみんな集まったの、園長先生お話ししてくれた。おサルと狩人の話だよ。おサルのお母さんと……」  
○「いーとーまきまき」とお遊戯と歌を実演して見せてくれ

る。

。「こいのぼり作ったよ。僕田中先生が言ったとおり切った  
りではったよ」

このころは、私が、「どんなお友だちいるの？」と尋ねても  
「知らない。いない」とまるで興味の無い様子であった。

バス通園が始まって十日ほどたつと、帰宅後衣服を着替え  
ながら、

「ママ！ 今日、バスが揺れたら、C君の足と僕の足がく  
つついたみたいに一緒にピョン！ て飛び上がったんだよ  
ー！ どうして？」

と一気に言つてズボンもはかずにすわり込み、足を上げてみ  
せる。友だちと出会つた子どもの興奮ぶりにどきまぎしなが  
らも、母親としてうれしい思いをした。

このことがあつてから、Hが帰宅後話す友だちの話題が、  
少しずつ増えていった。ここにそのいくつかを紹介したい。  
。「N君ねー指のここに怪我したの。T先生赤チンつけてく  
れたよ。そうしたら僕もこの指痛くなって、T先生に赤チ  
ンつけてもらったんだよ。どうして？」

。「Aちゃんね、僕のことこうするよ（自分のシャツをギユ  
ッとつかむ）。それできたなーい顔して僕にこうするの（母

の顔のすぐ前に自分の顔をすえる。ね。僕、Aちゃんに見  
つからないように隠れていたの」

。「Mちゃんね、僕のことダーイスキなんだ！ 僕、バッチ忘  
れたら、僕に「バッチ無いよ」って教えてくれたあ」

。「今日M君とC君と森で遊んだよ。M君とC君は、昨日は  
仲間じゃなかったけど、今日から仲間になったんだ。僕が  
泣いても助けてくれたんだ」

。「テレビを見ていて「アア！ アア！ アア！」と言つて足  
をたたく。「この歌だ！ この歌だよ。B君いつも歌つて  
るの。B君この歌歌つてたんだー！」と言い、一緒にテレ  
ビに合わせて歌い始める。

。「Y君今日幼稚園で泣いてた。僕そばにいてあげた」

そしていつの間にか帰宅後も同じクラスの子どもを家に連  
れてきたりするようになった。「ここ僕のうちだよ。あれ僕  
のママ」などもっともらしく紹介し、自分のおもちゃを出し  
てきて、説明書よろしく使い方を教えるのである。

こうして、先生や友だちには気づいていく反面、Hは幼稚  
園にどんな遊具があるかについては、この二か月間殆ど話を  
しなかった。僅かにこんなことがあつただけである。

。夜いつまでもごちそう作りに余念がないので、母が「あし

「たまた幼稚園でごちそう作ったら？」と口を出すと、Hはハッとして「幼稚園にままごであるかな？ あるかねー？ あるね、あるねきつと」とやっとながついた様子であった。

母親としての私にとっては、入園以前の子どもの動き方、四月からの、家庭とその周りの地域のつながりを基盤とした子どものふるまい方、地域性がより拡大した幼稚園場面での子どものふるまい方の、各々が新しいものであったし、それは母親としての私と、新しい子どもとの出会いでもあった。そしてそれは、子どもにとっても各々の場面で異なったふるまい方をする自己との出会いでもあったようである。

○入園して間もなくは、「僕、幼稚園で何もしないよ」と言っていた。

○しばらくすると「僕、先生が何しても良いって言う時、何もしないんだ」と言ってフツと寂しげになる。

○最近も、「僕、先生が何かしなさいって言った時はやるけど、後はやらないよ！」とポツリと言うのである。

全く「しらけ」てしまうようだ。家庭では夢中で遊んでいるこの子がしらけるなんて、と不思議に思える。つい昨晩も、おとながお風呂から出てしまった後、十五分間も一人で「僕

は小人だよ！ 巨人の靴をみがくんだ！」と湯舟を磨いていた子とは思えない程である。これから先、幼稚園でも心から楽しんでる自己、喜んでる自己と出会ってほしいと願わずにはいられない。

ともあれ、二か月前までは、自分の家のことを「ママの家」と呼び、「ママの家」からは一歩も一人で出ようとしなかった子どもが、「僕の家」と呼び、園から帰宅後、おやつを口に入れながら、友だちの姿を捜すようになっていったことは、本当に嬉しいことだった。祖母のふところの中で貯えた生きる力が、家庭と地域社会の中にしっかりと根を張り、幼稚園での新しい人や、物や、自己との出会いという肥料を得て、のびのびと育ち始めたと見える。エゴの木の真白な花の散る下で「雪やコンコン」を歌う子どもを見るにつけ、森の中から棒をふりまわす子どもたちの歓声を聞くにつけ、今始まったこの「家庭」と「地域」と「幼稚園」の三者のチームで行なわれてる保育活動を、なんとか実りあるものにするていきたいと思う、今日この頃である。